

# 社寺建築及臺灣檜材の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

東京市麹町區有樂町三丁目三番地

社 寺 工 務 所

(電話銀座四〇八八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外壘箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大阪支所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、木理整然
- 六、木色高雅

## 目 次

教義信條の整束……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける觀音賢經……………	井 村 日 成
罷 睡 錄……………	黄 薇 菴 青 村
童べらばうの話……………	古 田 昂 生
記事報導……………	

第廿九年拾二月號

不許複製

大正十四年十月十七日印刷  
大正十四年十一月一日發行  
東京府荏原郡品川町南品川四百二十二番地  
發行(第三百六十八號)

統一定價		統一廣告料	
冊	年	頁	行
一冊	一年	一頁	一行
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	貳拾錢	九錢
送料五厘	送料共	圓	圓
送料共	送料共	圓	圓
事之金前	事之金前	圓	圓

發行所 統一發行所  
編輯所 統一編輯局

東京府荏原郡品川町南品川四百二十二番地  
振替東京五一〇七一番  
名古屋市東區田代町字城山七十七番地  
振替名古屋一〇八一九番

編輯 國友 日 斌  
印刷 鈴木 日 雄  
印刷所 三益社  
東京府荏原郡品川町南品川四百二十二番地



# 教義信條の整束

(妙法華經の經旨)

本 多 日 生

本日は法華經の全体に亘つて教義信條の整束をお話して見たいと思ふ。法華經は多方面の教義が説かれて居つて、往いて言へば一切經を歸結せられたる教であること故に、いろ／＼の問題もあり、又頗る深遠なる教である。それ故に、古來この經を解釋する上に意見の相違が現れて居るのみならず、日蓮門下に於ても法華經に關する思想は完全に統一されて居ないと思ふのである。これはどうしても法華經の教義信條の整束といふことを闡明にする必要があると思ふのである、それ故に自分の研究鑽仰した結果を纏めてお話し申して見ようと思ふ。從來も屢々法華經に關してはお話を致したことであり、書物としては「法華經講義」として詳細に法華經に關する意見を發表したのである、その他「法華經要文講義」に於ても全体に亘つて意見を申述べ、又「法華經の心髓」と題する書物の如きも、特に壽量品に就てはあるけれども、それに依つて法華經の精神を明かにしたのであるから、從來の研究發表に於て自分の意見は明かになつて居ることではあるけれども、これを更に簡潔に整頓してお話して見たいと思ふ。

法華經の重大なる教義は五つの點に存するので、一つは一切經を綜合統一するところの教義に關する思想である。いま一つは法華經に教ゆるところの實質であつて、  
が三つに分れて、宇宙に對する實相の

説明と、個人に就ての本体の説明と、佛に就ての本佛の顯本と、この三つが法華經の實質である。さうしてその中よりして實際の修行を導いて來たので、そこに法華經の實行方面があるのである。この教義と、實行と、それからその實質であるところの三つの事柄とが法華經の五大教義を成して居る。法華經を原本から英譯したケルンの如きは、いまの第一に申した教義の結束をすること、佛陀の眞實を顯はすこと、の二つを取つて、法華經の重大なる教旨として居るのである。天台智者大師の如きは宇宙に關する實相の教を第一として、それに續いたる第二の事柄として佛に關する説明をしたるものと見て居るのである。この天台大師の考が何處までも法華經觀の上に附いて廻つて居るやうに思ふのであるが、併しこの天台の法華經觀が決して最上のものではないと思ふのである。

そこでいま申すところの五つの事柄に就て最も重要な問題がそこに二つ現れて來ると思ふのである。一つは法華經の實質に就て、天台の言ふが如くに、宇宙の實相、而もそれが「眞如」といふことで、さういふ實相眞如が法華經の經體であつて、それに基いて佛は生れて來るのである、故に強いて法華經の一番大事なものを取るといふならば、諸法の實相を明かした眞理の説明に存するものであるといふのである。これが果して法華經の解釋に於て最も秀でたるものであるとするならば、吾々の信仰を以て進んで行くところの日蓮門下の修行は役に立たないことになると思ふのである。宇宙の實相眞如を最高としてそれに向ふといふことならば、やはり天台大師が教へた通りに法華三昧止觀の妙行に入つて、先づ自分の智慧を磨いて、さうしてそこに解行證といつて、それを理解し、それを實行し、それを證りあげるといふ順序に進んで行くよりほか、法華の修行は無いものであらうと思ふのである。そこでこの實相眞如を以て經體とする

ところの思想と、モウ一つ日蓮聖人の開發せられたところの「開目鈔」の本佛の顯本を以て法華經の最高教義とする思想との、この關係を明かにすることが、法華經に關する教義信條の結束に就て一番大事な問題と相成ると思ふ。

いま一つの問題は修行に關することであるが、南無妙法蓮華經と唱へる、又は字に書いてお祀りをするといふことの爲に、この南無妙法蓮華經といふ字なり言葉なりが一番尊いのであつて、佛様といつてもその南無妙法蓮華經のお蔭で出來たものだ、吾々の信仰はその南無妙法蓮華經を信じて居るのであるからそこで佛様を粗末にするといふ譯ではないけれども、佛様に救うて貰ふのではない、南無妙法蓮華經に救うて貰ふのちやといふ考を有つ人がだん／＼ある、さういふ解釋が存して居るのである。それが果して正しいものかどうかといふ點に問題があるのである。これは日蓮聖人も最初の頃にはさういふ意味に依つて宗旨を弘められたので、御遺文の中にもさういふ言葉が出ては來るのであるけれども、併しそれが日蓮聖人畢生の主張の本懐ではないと思はれるのである。日蓮聖人の本懐はさういふ點にあるかといへば、南無妙法蓮華經は本佛と吾々とを繋ぐ間のものであつて、それはいろ／＼の意味に定められて居るが、要するに本佛の吾々を救はれる方法として、或は一切經を説き、或は法華經を説かれるのであつて、この題目を唱へるごときことは、法華經を讀むとかいふやうな法華經に關する修行——受持、讀、誦、解說、書寫の五種の行を結束して、ただ題目を唱へさへしたならば、法華經を長々しく讀まぬでも、それに代る功德を具へるといふことを仰しやるのであつて、決して題目を絶對のものとして、それが根本になつて本佛が生れたといふやうな意味ではない、この點に於て十分の考察を要する譯である。

一つは天台の「法華止観」が立派な説明であつた爲に、何處までもそれに影響せられて、法華經の更に大切な點に進むことが出来ないやうに思はれる。一つは日蓮聖人の宗旨建立の最初に唱題行を主張せられた爲に、その佐渡己前などの思想が何處までも影響をして、遂に聖人の本懐の所に達し得ないのであると思ふ。この二つを警戒してこれを明かにしなければ、永久に法華經の教義信條は結束することが出来ないであらうと考へる。

それをたゞ吾々の學問上の考からのみ解決をしようとすれば、「お前はさう言ふけれども、自分は斯う考へる」といふことで、議論葛藤は永遠に盡きないのである。そこでさういふ場合には日蓮聖人の言はれた「依法不依人」の金言に基いて、法華經そのものを最も嚴肅に正直に研究をして、さうして法華經の歸結が何處にあるかといふことを明かにすれば、誰もそれに反對することは出来得ない次第である。そこでいろ／＼問題もあるけれども、私はこの二つの事柄に關して、法華經の上に現れて居る經旨を紹介して見たいと思ふのである。

第一に天台智者の言はれた、宇宙の實相を説くのが法華經の極點であつて、それから佛が出て來るのちやといふこの思想は、これを透門の經意だと從來申して居るけれども、私は、與へて言へば透門の經意と言へようけれども、奪つて論ずれば透門の經意にも適合しないもので、天台のその觀念は法華經の經旨に達して居ないと斷言をすることが出来やうと思ふのである。さういふ所からその事を申すかと言へば、なるほど法華經は諸法の實相を説いたものに違ひないが、その實相そのものが、十界を離れてほかに存するものではない、若し最初からして佛様が實在せられないとすれば、その場合は迷ひの者だけ存して居る

世界であつて、暗黒の世界であるのである、さういふ暗黒の實相に依つて、それから光明を發する佛が出て來るといふことは頗る不道理なことである。非常な暗い、迷つた、間違つた者ばかりが寄つて居る中から佛が生れて來た、斯う言ふのであるが、それは宇宙の實相を誤つた觀察であると思ふ。一切のものは始め無く終り無く存在するとして認めなければならぬ、迷へる者も無論始めよりありしものといふことは異存はないけれども、悟れる佛様に對してこれを第二に解釋をする、即ち最初は迷へる者のみであつて、第二段に悟れる佛が出来たといふことは、實相の觀察を誤つて居るものであると言はなければならぬ。恰も夜と晝とがあり、或は春夏秋冬があるものを、天地自然は冬と春と春だけである、斯ういふ風に天台は言つて居るのである。冬と春とから夏と秋とが生れたのであるといふやうな議論であるが、春夏秋冬には何れが親であり、何れが子であるといふことはないのであつて、宇宙の實相そのものの中に春夏秋冬があり、夜と晝とがあるのである。それを夜が晝の親ちやと天台大師は言はんとするのである、夜は決して晝の親ではない、夜も晝も共に實在であるといふことに於て、始めて宇宙の實相が見られるのである。その點が天台大師の宇宙觀に於て、哲學上から見ても不道理の結論に陥つて居はしないかと私は考へるのである。

日蓮聖人はその點を突込んだのである。天台智者大師が、最初に佛は無いやうな説明をせられるのはこれは無明緣起の法門であつて、決して眞實の説明ではない、十界久遠と主張をするのである。「開目鈔」の中にも「九界も無始の佛界に具す」と申して居るのであつて、佛様に就て言つても始無き實在を主張して居るのである。「本尊鈔」の中にも「五百塵點乃至所顯の無始の古佛なり」と申して居るのである、「十法界鈔」の中には「十界の色心常住」といふことを申して居るのである。この點は日蓮聖人が御主張なされた

のであるが、併し日蓮聖人がそれを作り出したのではない、法華經の經旨がそこにあるといふことを開發せられたのであつて、聖人に依つて無かつたものを附加へるのではない、本來ありしものを天台が開發せざりしが故に、日蓮聖人がその點を發揮したものである。本來ありし法華經の經旨を天台は押へて發揚しなかつたといふことになつて居るのである。

又法華經と申しても結局は眞理に基くものであること故に、最も看易い眞理は、一切の現れるものは悉く原因を有つて居るものであつて、こゝに佛様があらんとするならば、それは始めよりあるところのものでなければならぬ。月の光がだん／＼三日月から十五夜に至つて光るけれどもこれは本來あるところの光であつて、決して元はお月様が炭團のやうな眞つ黒のものであつたのが、何かに觸れて光り出したといふものではない、さうして三日月の頃にはそれだけしか光るものが無いのである、だん／＼十五夜に至つて全部で光るやうになつたのだが、併し光らない方のお月様が本で、光り出した方は第二段だと言ふのは間違つて居るのである。光らぬやうに見えたのは或るものが違つて居るから光らぬやうに見えたけれども、晦日の月からして月の本体は光つて居るべきものであつたのである、光つた月が第二に出來たものぢやといふのは間違つて居ると思ふのである。吾々が佛様に成るといふことも、成つた時佛が出來るのではなくして、立派な佛性を有して、本來實在であるべきものが佛性を暗まして居つたその雲りを取除いて光つて見れば本來の佛である。即ち月を見るのはその時であつても、月の光は本來の光である、夜明に杜鵑が鳴くのを聞いて始めて窓を開けて月を見た、その人は夜明けに始めて月の光を見たのであるけれども、併し月は宵から光つて居つたのである。「ほとゝぎす鳴きつる方を聞むればたゞ有明の月そのこれる」といふのは

杜鵑の聲に眼醒めて窓を開けて始めて月を見たのであるけれども、見た時始めて月が出來たのではなくして、宵から輝いて居つた月である。

それ故に佛様の悟りは決して途中から出來たといふものではなくして、諸法の實相、その中に於て佛様の實在を明かにしなければならぬのである。實相を載いて始めて佛が出來るのではなくして、實相の中の最も大切なるものが佛様であると言はなければならぬのである。丁度日本の國がありし始めよりして、皇室の尊さが傳はつて居るが如くに、日本が出來て後に皇室が出來たのではなくして、皇室に依つて日本の國が經營せられた如く、宇宙の實相があつて佛を生んだのではなくして、宇宙の實相と同時に佛があつて、而して初めて實相にも光があるのである。宇宙の實相そのもの、中に佛が在まらずして、盲者ばかり居るのであつたならば、少しもその實相といふものは有り難いものではないのである。

この點は非常に大事な事柄であつて、日蓮聖人の御遺文の中でも、一通りたゞ天台の説に基いて一念三千の解釋をなされたり、或は諸法實相のことを仰しやつたりした所もだん／＼あるけれども、それは何れも日蓮聖人の發明でもなければ主張でもない、あり來りの天台の言ひ分をその儘仰やつたに過ぎないのである、何かの必要で仰つただけのものである。日蓮聖人の法華經觀として意見を發表せられたところには、それとは行き方が全然違ふのである。それはどう違つて居るかといへば、「開目鈔」に示された法華經の二大特色としては「二乗作佛」「久遠實成」といふことであるが、この二乗作佛の方に「一念三千」を附けて考へられて居るのである。この二乗作佛の佛性觀の方に於て、それ等のものが佛に成ることを許されたのは法華經の述門方便品であり、他のお經に於てはこれを許さなかつたのが大きな缺點である。然る

に透門に於て二乗作佛を説き一念三千を説いた、一念三千といふのは、語り少しでも心さへあるなれば三千諸法を具するが故に、その中には佛性を具する、佛性を具するが故に佛に成れるといふことを真理の上から立證するのである。苟も心あればその心の中には三千あり、三千の中に一番大事なものは佛である、ただ何もかもあるからといふのでは大した有り難いことは無い。この中に地獄の性も餓鬼の性もあるけれども、それは誘ふべきものではない、無くても困るけれどもそれは尊いものではない。何かの必要に依つてある方が宜しいといふ議論は立つけれども、結局一念三千の大事な點は、劣れるところの誦らぬ心中に尊い佛性がチャンとござるといふことを合理的に説明するのである。「観心本尊鈔」に

吾等が劣心に是の如き尊き佛を宿す。

と言はれた、劣れる心に尊い佛が宿るといふ、その劣ると尊いといふこととの關係である。「一念」は吾等凡夫の誦らない劣れる心である、「三千」はいろいろあるといふ中に於て尊き御佛を含んで居る、我が劣れる心の中にそれが具へられて居るといふことを現したのが一念三千の精神である。ところがその佛を輕んじて、佛などは途中から出来たもので、始めには佛が無いといふのであつては、これを打消すやうになつて來るから、一念三千の法門が壞れてしまふ、二乗作佛といつたことも根柢を失つてしまふこと故に、どうしても尊き佛様の實在を十分論證して來なければならぬぢやないか。そこで日蓮聖人は「開目鈔」に斯う仰つたのである。

此等の二つの大法は一代の綱骨一切經の心髓なり、(即ち二乗作佛と久遠實成とが一切經の魂である) 透門方便品は一念三千二乗作佛を説いて爾前二種の失一ツを脱れたり、(即ち二乗作佛の方は一應許し

たことになつて居る) しかりといえどもいまだ發達顯本せざれば(透門に於ては本佛の眞實を顯さなかつたが故に) 實の一念三千もあらはれず二乗作佛も定まらず。

こゝに「實」といふ字を附けられた、一通り天台大師が言ふやうに理論的に説明したことは透門であるやうだけれども、一念三千の極意が、劣れる心に尊き佛ありといふ、これが無かつたならば一念三千の魂はないのである。然るに佛様の事を輕く見て、實相眞如一念三千が尊いのである、佛様はどうでも宜いといふやうなことを言ふならば、一念三千の骨子である佛を倒したる時、一念三千も顯れず二乗作佛も定まらぬ、だから一念三千も二乗作佛も、恰も根柢無し草の波の上に浮ぶが如く、即ち根柢が無くなつてしまふといふことを言はれたのである。この言葉は十分味はなければならぬ。

實の一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず、水中の月を見るがごとし、根なし草の波の上に浮ぶるに似たり。本門に至りて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる。

といつて本佛を光顯してこの本佛の實在が明かになつた時、始めて實の一念三千も顯れ、二乗作佛も定まるのである、さうすると日蓮教學の生命は、一つの發達顯本したところの本佛の實在に依つてのみ宇宙觀の一念三千も定まり、吾人の人身觀の佛性論も定まるのである、法華經の實質であるところの三大教義の、自己に關する説明も、宇宙に關する説明も、佛に關する説明も、往てはこの佛身實在の一つに依つて興廢するといふことを明かにしたのが日蓮教學の生命である。何もこの他に殘るものは無いのである。

然るに佛様に對して、一念三千の妙法がどうぢやとか、或はその他の事柄を持ち來て從來彼れ此れ言うて居るのは、この「開目鈔」の「發達顯本せざれば實の一念三千も顯れず二乗作佛も定まらず」と言は

れたこの趣意がわからないから起ることであらうと思ふ。佛様が一つ無ければ宇宙の眞實もわからず、自己の本体もわからない。それはわからない筈である、これを丁度日本の國情に就て考へたならば直ちに了解が出来る、上天照大神より今上陛下に至り、尙ほ子孫萬世に傳はつて行くところの皇室の連綿として實在せられて居る事柄が一つ明かにならなかつたならば、これが時々變るとか一時的であるとかいふことになると、皇室が存続せられないといふ一つの事の爲に、日本の國情、日本の國體、國全体といふものが倒れてしまふのである。我國の皇室の興廢は即ち國家の興廢である、さうして日本民族の國民精神といふか大和魂といふか、日本人の大切なる所といふものは飛んでしまふのである、皇室だけのことでない、皇室の事が日本全体のことであり、國民精神のことであるといふことがわかるのである。皇室を除けて置いて日本の地理であるとか、日本の歴史であるとか、日本民族の性質であるとかいふことを研究して、さうして日本がわかつたといふならば、それは眞の日本を理解しないところのもので、たゞ科學的に、或は人類學的に、社會學的にさういふ土地と人間とを研究したといふことになるのである。今の吾々が認めて居るところの日本といふものは、土地と人間とはなくして、そこに中心に皇室を載いて「此の國就か君臨す、萬古天皇を仰ぐ」といふやうに、皇室を載いて立つて居る國情であり國民であるといふことが、一切萬事の興廢に關係を有つのである。

宇宙の實相に於ても、本佛の實在せられるといふことを除つたあとの眞暗がりの實相であり、本佛を戴かない衆生のウジヤムシした盲目なやうな心だけであるならば、決して尊いものではないのである。宇宙も本佛の光を受けてそこに輝きがあり、衆生も本佛を戴いて佛性の光があるのである。佛様のことを明も、それが十界の因果に關係する。

本門にいたりて始成正覺をやふれば四教の果をやぶる、四教の果をやふれば四教の因やぶれぬ、へこれかにするのが唯だ佛様の事に限るのではない、全宇宙の眞實と、全衆生の眞實とが懸つて本佛の眞本にあるといふことを、日蓮聖人がこゝに喝破したのである。だから壽量品は佛だけのことのやうであるけれども、それが十界の因果に關係する。

までは佛様のことであるけれども、その佛様の一つから直ぐ進んで、爾前蓮門の十界の因果を打ち破つて本門の十界の因果をとき顯す、此れ即ち本因本果の法門なり。

斯ういふ風に、佛一つのことと一切衆生の眞實の因果がそこに顯れるといふことを仰せられたのである。此點に徹底せずして、佛様の問題が出た時分に、直ぐに諸法實相がごうちやとか眞理がごうちやとか言うて、佛様の頭を撫でつけるやうなことを言ふ間は、法華經の實義には徹底して居らぬものちやと私は明瞭に斷言するのである。

丁度日本に於て近來いろ／＼の思想が起つて、皇室の尊嚴を冒瀆するが如き觀念もあるのであるが、さういふことは諸君がお考へになつても恐いものちやといふことがわかるであらう。或は人民の思想が一番大事ちやとか、或は日本の國土が一番大事ちやとか、國土と人民の意思さへ通れば皇室の尊嚴は第二に考へても宜いといふやうな頭腦を有つ者がある。即ち難波大助の如きはその一人である、彼は公判廷に於て「日本の今日あるは皇室の幸徳の然らしむる所ではないか」といふ裁判長の訊問に對して「さうではありませぬ、これは日本國民の力でありませぬ」と彼は言うて居る。それは國民の力も幾分あるけれども、日本が興隆するのは皇室の御聖徳が根本であつて、國民がこれを翼賛して今日に來つたといふことを考へな

ければならぬ。それを逆に言ふといふことは、日本に取つては逆賊難波大助となるのである。日蓮教學上に於ても、本佛の威徳を冒瀆するやうなことを臆面も無く言ふ難波大助の如き者が續々現れて居ることを諸君は知らなければならぬ。我が國家の問題に就て言へば直に丁解せられるであらうけれども、法華經の極意、日蓮聖人の心血を注いで闡うた眞意に至つては、この話をする者が餘り居らないといふことは、日蓮教學の頽廢混亂その極に達して居る事がわかるのである。

この點だ、吾輩等が生きて居る間に力説して置かなければならぬのはこの點である。そこでなにも天台を馬鹿にする譯でもなければ、一通りの學説を罵倒する譯ではないが、これが實に經意の心髓に關係するのである。丁度日本の皇室の御盛徳を國民の力よりも尊しといふ所に於て、國體が立つて居るが如くにこれは決して強いて皇室を讀め上げるといふ譯ではない、事實皇室の聖徳あるからこそ、日本人に大和魂があつて、隨つて國威國光を輝かして來たのであつて、たゞの人間の力ではない、皇室を仰いでそこで感孚する所に日本民族の力が現れて居るのである。吾々衆生が今後佛様に成るとか、菩薩行を積むとかいふ根本は、本佛の御光に感孚する所に於て、菩薩行があり、佛様に成るといふ光はそこから現れて來るのである。現に佛法を信じて居る總ての者は、本佛の慈悲の御光から出て居る所の教なり威化を受けて、さうして斯の如くに多くの人達がこの地球上に於ても、永き歴史に亘つて本佛釋迦如來の教導威化の御光の下に向上發展をして來たものである、論より證據である。それを佛敎を奉しながら、釋尊の御威徳を少しも傷げんとするが如き觀念が湧いたならば、恰も日本人でありながら皇室に及向ふ難波大助の卵になるといふことを自覺しなければならぬのである。

この事を一つ決定して置くと、多くの話が出て來て敎義が混亂する場合に於て、それを解決することが非常に能く出来る、あらゆる敎義葛藤の解決の鍵といふものを諸君にお與へする次第である。それから今一つは題目を唱へるといふ事、題目の文字を拜むといふ事から、佛様に關係するところの思想の混亂に關してあるが、題目の方に就ては、唱へる場合と、字で書いて拜む場合とが違つた意味で現はれて居る。唱ふる方は唱題行であつて、それには淨土門の念佛を唱へるところの稱名行と關係をしていろ／＼そこに思想が起るのである。念佛宗でいへば「南無阿彌陀佛」と唱へることが一番善いのである、併しそれは念佛宗に於ていふのは「南無阿彌陀佛」といふ念佛とその對手の佛である、「阿彌陀佛」とは違ふ、「南無阿彌陀佛」と唱へる言葉はたゞ言葉である、さうして阿彌陀佛といふ生きた佛様があると思つてそれを信じて、それに歸依して「南無阿彌陀佛」と唱へて居る、即ち稱名行である。「阿彌陀佛」といふ實在——本當の實在ではないが假に西方に御座ると思つて居る佛様と、その「南無阿彌陀佛」といふ聲とは違ふ。所が法華宗の方は「南無妙法蓮華經」といふ聲だけあつて、その本体は何かと言つと、それが鬼子母神になつたり、帝釋になつたり、萬有神になつたり、何にでもなる、そこは餘程大きな問題である。念佛宗の者は南無阿彌陀佛と唱へるが、「お前は何を信じて居るのか」と言つたならば、「鬼神母神様を信じて居ります」といふやうな者は居らない、「それは阿彌陀佛を信じて居るのだ」とビタリと定まる。所が

「南無妙法蓮華經」の方はその意義が多含的になつて、何處にでも行つて、その内容に入れば實に混亂した殆んど拾收すべからざる状態を呈して居るのである。これは學問上からいへば萬有神敎化して居るところの題目といふので、その内容の方に行くと眞言に似て來たものである。眞言に似て來たのはどこから來た



かというところ、これは唱へる方からではなかつた、字で書いた方から来たのであるが、そこに思想が混線して来た、字で書いた「南無妙法蓮華經」の題目が、筆がはねてある、そのはねてある中に十界の諸尊が勸請されて居るから、お題目はその全体を包んで居るのだ、南無妙法蓮華經といふのは佛様でも菩薩でも神様でも提婆達多でも阿修羅王でも、何でも皆な入つて居る、名前が書いてない者も總代で出て居るのだから、田吾作でも孫兵衛でも皆な入つて居るのぢやといふやうに考へた、詰り題目で行けば何處にでも行くといふことを考へたのである。この思想は無論御遺文の中にもさういふ風の事があるので「日本の二字に豈に六十六箇國漏るべしや」日本と言つたならばその中に六十六箇國の人畜財寶すべてが含まれるが如きものぢやといふで、「南無妙法蓮華經」は「日本」といふやうなものである、日本には山も在り川も在り、人も居り獸も居り、何でも在るといふやうな意味に解釋せられたところから、その方の解釋だけが一般に弘まつて行つたのであるが、併しこの日蓮聖人の宇宙神教的に解したところの題目が本當のものかどうかというところ、本當のものではないのである。それが所謂佐渡己前の教義と稱すべきもので、「佛の爾前經とおぼし召せ」と『三澤鈔』に言はれたことになる。それで大体この唱へる方と字で書く方との二つに就ていろ／＼混線して来て居る、その意味合ひを明かにして置きたいと思ふのである。先づ最初に正しい方の意味を申上げて、次に間違つた方の思想に就て、その根柢を擧げて解決を與へて置きたいと思ふ。

日蓮聖人の唱題行をなさつた最初は、ハッキリ定めないうで南無妙法蓮華經を唱へる修行を始められた、それが先づ宜しい、念佛を言つたりいろ／＼唱へ言葉のある中で、法華經の題號を唱へて、法華經の内容に説いてあるところの教を信するといふ精神を鼓吹するが宜しいといふやうな工合で、題目を唱へられたのである。併しその當時から日蓮聖人の腹の底にあつた一番大事なこととは何であつたかというところ、さういふ事ではなかつたのである。これは唯今申した本佛の大慈大悲の救ひに、吾々は南無妙法蓮華經に依つて連繫をとるのである。このことは唯だ題目の場合だけではないので、一切の救ひといふものは、壽量品の經意から言へば本佛の活動であつて、お自我偈の終りに「毎に自からは是の念を作す」といふことがある、「是の念」といふことはどういふことを本佛はお考へになつて居るかと言へば、何を以てか衆生を助けてやりたい、如何なる方法を以てとも……と一生懸命お考へになつて居るといふことが説いてある。この「何を以てか」といふことがいろ／＼に現はれるけれども、大事なことは、それが爲めに身を現はして、小さく言つても今度天竺に御降誕下されたといふことは、何を以てか衆生を救うてやりたいといふことの爲めに、先づ悉達太子として身を現して、八相成道の儀式を示して、遂に一代の佛敎を説て衆生を教化するといふことになるのであるから、どうぞしてこの衆生を救うてやりたい、殊にこの娑婆世界の衆生を救うてやりたいといふことの爲めに、迦毘羅衛城に御降誕なされて、遂に佛様の成道をお示しになつたのである。そこに身を現して下されたといふことが、一番吾等を救ふところの手近な連繫である、この連繫といふことを輕いことのやうに考へる人もあるが、連繫が大事である。本佛はいつもかまも始めなく終りなく盡十方に實在し給ふても、吾々に少しも連繫が來なかつたならば、永遠に吾々は知らないのである。そこで吾々に直接知らしめる連繫といふことの爲めに、佛はこゝに出現して下さつたのであるから、現の世に出て下さつたといふことが非常な有難いことになるのである。佛様が現の世に出て下さらなかつたならば、今も

尙少しも佛法に教へるやうなことは知らずに居る譯である。釋迦如來が出られないので誰かそれを發明する者があるかというところ、ナカ／＼その發明が出来ないのである。それは又實にえらいもので、澤山の學者や人物が出ていろ／＼人を教ふべき教のやうなものを説き、教化の方法も講じたけれども、釋迦以外に釋迦の如き偉大な教を立てた者は東西古今にひとりもない。又將來とてもちよつと出て來さうにもないのである、モウ何年待つたら佛様のやうな人が出るかといふことになつたら、それはマアちよつと出まいと言ふ方が確かだらうと思ふ。この全人類の中にあのやうな傑出した方が出て下さつたといふことが、闇夜に太陽の光が現はれたやうなものであつたのである。

併し此の世に出られたざりて、釋迦如來が黙つてお居て居たならば、吾々はやはり何も知らないものである。佛は正覺をお聞きになつて居つても、吾々との連繫は、この身を現した佛が説法をして教を説いて下さることに依つて、始めて佛の聲が吾々の耳を通して精神に響くことに依つて、そこに連繫が取れるのである。それ故に「佛口より生じて」といふことがお經には言うてある、吾々が佛の子であるといふ眞實の自覺は、佛様の口の説法であつた、めて貰つて、そこに解ひ出たのが佛の子になるのである。その説法を聴かずに、電車に乗つてガヤ／＼行くやうな者は、これは地獄の子であるとか餓鬼の子であるとか、畜生の子であるとかいふ方に引きづられて行くけれども、この説法を聴いて温められたところから佛性を啓發して、佛子といふ者が解ひ出るのである。それ故に釋尊の説法が非常に有難いことになるのである。

——本佛——慈悲  
——智慧

是念………(以何)——現身  
——說法

この現身と説法に依つて釋尊の御在世の當時の人々は救はれたのである、これ以外に佛教に依つて救はれた者は一人もない。佛様の御姿を拜せず、佛様の説法を聴かない者は、佛在世に生れたる者と雖も、決して救ひを受けることは出来なかつた。それは連繫といふものが斷れて居るからである、佛滅後になつてもやはり同じ關係で、この佛様の御身に代はる爲めに茲に佛像が現はれ、説法を結晶するところに經典といふものが現はれて來たのである、お寺の本堂で一番大事なもの、眞中に祠つてある佛様の御像と前に置いてあるところのお經である、それを除つてしまつたら何もお寺ではない。この佛の現身に代るに木像を以てし、説法に代るに經典を以てして、佛と吾々の連繫を今も尙ほ結つて居るところのものである。そこで之を「三輪の妙化」と申して、「是の念を作す」といふのは、どうぞして救つてやりたいといふ佛の「意輪」の慈悲心である。この慈悲から來て「何を以てか」といふことで「身輪」の身を現じ、「口輪」の法を説き給ふたものである。

——本佛の慈悲心  
——意輪(是念)………(以何)——身輪(現身)  
——口輪(説法)

本佛といふのは即ちこの身口意の三輪の妙化全体をいふのである。この本佛の慈悲が、遂に身を現じ法を説き給ふところに現はれたのである。だから本佛を信すればこのあらゆる身を現はしたる現身の全体と、

あらゆる説法の全体と、その大慈悲の本源との三輪の妙化全部を信することになるのである。お題目であらうが一切經であらうが、様々の佛の名であらうが、千變萬化がかりなき總てのものを皆な纏めて、根本の「是の念を作す」と言はれた本佛の大慈悲の下に纏めて信するのを、之を日蓮主義の信仰と申して居るのである。

そこで正しい意味の題目といふのは、この二つの意味が變らぬやうに解釋しなすれば間違ひないのである。南無妙法蓮華經と唱へる唱題の聲、それは一切のお經を纏めてランビキにかけたのである。一切經を法華經に依つて統一し、法華經を題目に統一したものである。一遍の題目は釋迦一代の五十年の説法を結晶したるものである。之を擴げれば一切經となり、纏めれば唯だ五字七字の題目といふのである。佛の御教の全体を間違はぬやうに、その精神を取つて信するところに南無妙法蓮華經といふことを唱へて居るのである。だから日蓮聖人は之を法華經の「要が中の要」と仰せられた、要が中の要といふのは廣、略、要と申して、法華經を廣げれば一部、之を略すれば方便品と善量品、モウ一つ略すれば善量品、さうしてお自我憐、斯ういふ工合に廣、略といふ關係がある、その中の要といふのはお自我憐の中の「每自作是念」の悲願といふが如きことである。私が善量品に吹きこんだ日蓮聖人の聖訓にもある「如何なる時節ありてか每自作是念の悲願を忘れ、如何なる月日ありてか無一成佛の御經を持たざらん」といふその「每自作是念」といふ言葉、「無一成佛」といふやうな言葉が要文といふのである。その要文の中の更に要なるものを取つて「要中の要」として南無妙法蓮華經の題目といふものをお採りになつたのである。ランビキにかけて生粹のところに縮めて見れば、一切經は法華經になり遂に題目になる。之を袋の方に譬へたならば

題目の中に一切を入れてしまふといふことになる。何れにしても一切經の教にかはつて題目といふものは唱へて居るのであるから、小さく言へば法華經を讀むかはりに南無妙法蓮華經を唱へて居るのである、だからお經を讀んだ終りにはそれを纏めて「南無妙法蓮華經」と唱へて居るのである、或はお經を略して唯だ「南無妙法蓮華經」と言つても宜しい、斯ういふのである。

それから今一つは文字である。五字の文字といふものは、これは本佛の身を現はされた所の佛身に對する渴仰を字を以て代用せしむるので、佛様の相は肉眼に於て見る事が出来ない、木像にしてお釋迦様を拜んでも、それは無論よいのであるけれども、木像でなくとも南無妙法蓮華經の文字を見たならば、この大事な教を説いて下さつた佛様の佛身を拜すると同じ威激をもつのである。昔のえらい人はこの題目を拜したる時、佛の御相がその中から見るといふことを書いて居る、「本佛の顔貌を拜す」と言つて、題目を拜すると言はずしてそこに佛様の御顔が見える。即ち南無妙法蓮華經と書いてあるその妙法蓮華經を本當に信心すれば、ここからお釋迦様のお顔が見えるといふことにならなければならぬのである。之を以てお釋迦様の頭を殿りに行くと思つたら大變な間違ひである。五字七字を拜する時、この尊とき一切經中最爲第一の妙法蓮華經を説き給ひし御佛は肉眼を以ては見えんけれども、何時も常住にお在りなされる「近しと雖も而かも見えざらしむ」と仰せられて、何時もここにお居りなされるのである。この五字の文字を拜する時、本佛そこに居ませりといふ信心に立つのである。題目の聲が耳に入った時、これは唯だの聲でない、南無妙法蓮華經と自分が唱へても、女房が唱へても、この美しい聲が響いたならば、平常慕うて居る一心に見たてまつらんと欲する本佛は、ここにお居りなされる、その本佛の御聲と思へといふことになつて居るのである。

そこが秘訣である。自分が南無妙法蓮華經と電車の中でも汽車の中でも唱へたならば、それは自分自身の聲ではない、本佛にお居でなさつてお説き下さるかと思ふ、そこに信仰の感激がある、そのわからん間は日蓮教學には未熟なものである、日蓮教學の卒業免状を與へることは出来ないのである。それはいろ／＼お經の方からも御妙判の方からも、どこからでも証明が出来ることである、往いて言へば一切經の教がそれを説明するところの材料になるものである。この私のいふ説明が佛敎の公道である。御經を讀めば讀む度に釋尊の御口から之を説法せられて居るものとして聽かなければならぬ。「爾の時に世尊三昧より安祥として起つて舍利弗に告げたまはく」と讀めば、「佛様がいま御説法なされて居るナ」と思はなければならぬ。それを「爾時世尊從三昧……」と讀みながら、それが狸の前や狐の前で唱へるやうになつたといふのは、三重も四重もの間違ひを潜つて居るものである。毒量品に依つて、「爾時佛告諸菩薩——」

「爾の時に佛もろ／＼の菩薩に告げたまはく」と讀んだならば、佛様はちやんと御座るといふことが一番に胸にひゞくのがお經を讀む大切な心得である。その佛といふのは誰もほかにありはしない、お釋迦様に限つて居るのである。どの宗旨の人が讀むお經でも、必ずお經の始めには「一時佛住王舍城」とか「一時佛住——」と言つて、必ずお釋迦様が御説法なさつたといふことになつて居る、それは必ずお經の劈頭第一に出て來る言葉である、それがなかつたら偽物ぢやと思へといふので、お釋迦様の御口を通らないものを佛法とは斷じて言はぬのである。それを各宗が寄つてたかつてお釋迦様を馬鹿にし始めたのが佛法混亂の本ぢやと言つて、日蓮聖人が憤激したのである。日蓮聖人の血の涙はそこから出て居る、日本に弘法大師が出て大日如來がお釋迦様よりえらいとか、法然上人が出て阿彌陀様の方が樂に教つて呉れるとか言

つて、釋尊に對する渴仰を横へ外らさうとした、それにして日蓮聖人が涙を揮つて、釋尊の慈悲に呉れといふことを絶叫したものが日蓮教學である。その又日蓮聖人の流れがいろ／＼の小理窟をつけて、同じやうなことを言ふに至つては、人間は餘り賢くないものぢやといふことがわかるのである。

それでこの事をお經の方で証據立て、置くならば、釋迦如來がこの法華經を説き終りなされる時斯ういふことを仰せられた。それは毒量品の中にもありますが、毒に中てられて居る子供の爲めに、如何にして救を與へようか、自分が何時もそこに居つて世話をしてやりたいけれども、さうすれば却つて憐愍の心を生じて、親が何時までも居るといふと、子供はそれに甘へて却つて覺醒をしないものである。それは人間の弱點であるが、ごこの家にもさういふ傾がある、親がどれほど親切でも立派でも、立派であればあるほど息子は馬鹿になつてしまつて、少しもその親が有難いと思はぬ。だから親孝行の子供といふ者は、必ず貧乏な家から出るのである、貧乏な家で親父が働いて歸つて來て、さうして「これで米を一升買て來い」といふやうなことになると、親が汗を出して買つて呉れた米だと感ずるけれども、富豪の家であれば、米などは何も親父が買つて呉れるものだとは思はない、電話をかけさへすれば米屋が持つて來るものだと思つて居るから、少しも親を有難く思はない。それと同じやうにお釋迦様の側に居ると言つと、やはり吾々はお釋迦様を有難く思はなくなくなるものである。それは兎角さうしたものである、吾輩の説教でも、いつも日曜に統一閣に行けば聽けると思ふ間は有難味がわからない、とう／＼死んでしまつた、モウ聽けないといふことになつて、その時に善音様のレコードを聞いたならば、始めて有難味がわかるだらうと思ふ。そこが人間の弱點であるけれども、宗教は渴仰の心といふものが大事なのであるからして、可哀さうだけ

ごも方便の涅槃を現じて渴仰の心を刺戟しなければならぬといふ、痛し痒しのところが佛様の上にあるのである。何時までも側に居て救うてやりたいと思ふけれども、説くべき法を説き終り、濟度すべき者を濟度し終つた今日、どうしても涅槃を現じなければならぬ、それにはどうして置いたら宜からうかといふ血の涙を以て留め給ふたのがこの教である。その教を結晶して置いたのが擠き笹ひ和合して良薬を子に與へて服せしむるといふので、それを「南無妙法蓮華經」に纏め給ふたのである。それ故に日蓮聖人が「本尊鈔」の終りに於て、

佛大悲悲を起して妙法五字の袋の中にこの珠を裏みて末代幼稚の頸に懸けさしむるなり。

と仰せられたのである。それは洵に明瞭なことなのである、それでお題目の有難さも能くわかる、少しも題目を粗末にする意味合ひはない。佛様の大悲大悲より出でて吾々に救ひを殘して下さつた、その救ひの綱が南無妙法蓮華經である。岸の上から墮ちかけた人間を救ひ上げる人が綱を垂れ給うた、その綱が南無妙法蓮華經である、綱の本を握つてござるのが佛様である、その綱に縋るのが吾等である。上に佛がなかつたならば、綱をつかまへても誰も引きあげて呉れる人がない。その南無妙法蓮華經の綱に本佛の自在神通の力があり、大悲大悲の力があり、廣大無邊の功德の力があるからして、そこにつかまつた者を悉くお救ひ下されるといふことになるのである。この點を日蓮教學が明瞭にしない限りは法華經は廣宜流布しないといふことは考へるのである。

これは法華經の終りの勸發品に再演法華と申して、一層明瞭にその點が現れて居る。法華經と言つても直ぐお釋迦様と思へといふことを懇々仰せられた、法華經とお釋迦様を別に考へることがいけない。即ち

經典を拜する時、そこに佛在せりといふ精神が最も大事である。自分がお經を手に披いたならば、一番に佛様といふことを考へなければならぬ、お經に何が説いてあるか、どういふ理窟が書いてあるかといふ、文字や理窟を講釋する前に、皆なそれは佛様の大悲悲を通して現れ來つた梵音である。だから斯様に説かれて居る。

若し是の法華經を受持し、讀誦し、正憶念し、修習し、書寫すること有らん者は、當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見たてまつるなり。

この法華經を受け持ち、讀み、考へ、そのことを習ひ、さうして之を寫したりする、法華經に關する修行をする者は、いきなり法華經に觸れた時は直ぐに釋迦牟尼佛を見たてまつるといふ觀念に立たなければならぬ。さうして佛の御口よりこの經典を聴くが如く、今經典として傳はつて居るものは或は活字となり或は木版になつて居るけれども、佛様の生ける御聲を面あたり聴くやうに思つて之を讀まなければならぬのである、字だと思つて讀んではならない、佛の説法の御聲をこゝに寫したるものと考へなければならぬ。それ故に

當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり。

佛様を渴仰し佛様を大切にするといふ考へを以て法華經に近づくのである。

當に知るべし、是の人は佛善哉と讚め給ふ。

その代りに讃めて戴くのも佛様から來るのである。

當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の手をもて其を頭を摩でらるゝことをせん。

頭を摩でて下さるのもお釋迦様である。

當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の衣に覆はるゝことをせん。

お釋迦様に衣を以て抱ていたゞくのである。救うて下さる人はお釋迦様であるといふことを考へて、法華經を讀み且つ思惟しなければならぬのである。これが再演法華と言つて、法華經の所謂教義信條を結束する場合に、この一點に力を入れてお釋迦様が御説教をなさつて居るのである、私が何も新しく申す次第ではない。勸發品が法華經の結末であるといふことは古來から言うて居るのである、再演法華と申して、法華經が終りに達したる時、普賢菩薩が法華の座に後れて洵に情けない、丁度上野の櫻が散りかけたやうなもので、どうぞモウ一日だけ散らすに置いて貰ひたいといふやうな渴仰の心を以て、今までのお話は濟んだけれども、モウ一遍要點だけでも宜しいから説いて戴きたい、再び法華經を説きたまへと願つた。そこで永々しく同じ事を説く譯にはいかんから、それでは大事なところを擧げて話さうと言つて説かれたのが勸發品であつて、その中に今いふやうな明文が説かれて居るのである。

それ故に題目を唱へるといふことは、法華經全体を受持、讀誦、解説、書寫するところの五種の行を纏めたものだといふことは、日蓮聖人は申すのである、五種頓修の行と言つて法華經の講釋をしたり、或は法華經を寫したり、或は法華經を讀んだり、さういふ事をするにかへて題目を唱へるのがその中では一番宜しい、法華經をいろ／＼人は講釋をするよりも、南無妙法蓮華經といふ方を纏つて居るのである。六萬九千三百八十四文字の法華經全体を寫すよりも、南無妙法蓮華經と唱へ、或は書き記す方が宜しいといふことを仰せられたのであつて、決して法華經を離れて題目がある譯でもなければ、佛を離れて法華經がある譯でもない

のである。

だから唱題行は、お經に就ての修行を代表するものと考へれば宜いのである。曼陀羅に書き現はされた題目は佛像に代るべきものである。だから題目がどの様に大きく書いてあつたからと言つて、それがお釋迦様よりえらいといふやうな意味ではないのである。

唯だ併し曼陀羅式の場合に於ては、お題目が中央に非常に大きく書かれて居るものであるから、題目が一番えらいやうに思ふけれども、この曼陀羅式に書かれたのが日蓮聖人の本尊として一番えらいのではない、依つて絕對の本佛を光顯せられたのが日蓮聖人の一番えらい所である。お曼陀羅はどつちかと言へば眞言的の曼陀羅に似通つて居るのである、そこは能く考へなければいかぬ。お題目を唱へるといふことでも、惡口を言ふ者は、念佛の眞似をして居る、曼陀羅を書いたのは眞言の眞似をしたのであるといふやうなことを言つた者もある。それは眞似か眞似でないかは、内容が違ふからして、左様な惡口は甚だ不都合であるけれども、併し題目を唱へること、曼陀羅を書いたことだけならば、日蓮聖人の光が半分ぐらゐ減つてしまふ。日蓮聖人の尊とさが彼等法然や弘法の及ぶべからざるものであるのは、書量顯本の經意に依つて絕對の本佛釋尊を光顯し給うた點である。この絕對の本佛に對しては大日如來も阿彌陀如來も顔色が無い所の、立派な宗教の思想を發表せられたものである。唯だ形に書き表はす曼陀羅の様式や、口に唱へる唱題行の形式に於て日蓮聖人がえらいのではなくして、宗教の實質に於て考へなければならぬ。宗教の一番大事なもの、吾々の信仰を捧げるところの本尊の本體でなければならぬ、それは無論人格のある方

でなければならぬから、その人格の説明が、キリストに依つて説かれる所の神、或は法然、親鸞に依つて紹介せられる阿彌陀、弘法に依つて紹介せられる所の大日、その他他の宗旨でいろ／＼説明する所の観音とか地藏とかいふものに對して、日蓮聖人が壽量品に依つて光顯したる本佛釋尊の思想は最も秀で、居るといふことを明かにして置かなければならぬのである。

その事は今少しく詳しく申したいけれども、時間を要するから略して置くが、過般大阪の講習會に於て「本尊論」と題してその點を十分に説明をして置いた、それを能く熟讀して貰ひたい。この曼陀羅式の本尊を現はした事、題目を唱へる事を始めたのが日蓮聖人の一番えらい點ではない、壽量品の極意に依つて、「開目鈔」にあるが如くに、「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、所謂主師親これなり、」この絶對の主師親の三徳者を壽量本佛の偉徳の上に光顯せられた所にあるのである。さうして日本に於ては鎌倉幕府と聞つて、當時飛鳥を落す威勢の強かつた北條氏を向ふに廻して、皇室の尊嚴を明かにせられた「隱岐の法皇は天子なり、權の太夫は民ぞかし」と喝破せられた。佛敎に就ては大日如來、阿彌陀如來、さういふものは皆な迹佛である、佛敎徒一般が信仰すべきものは釋迦牟尼佛を根本とした絶對の意味に於ての釋尊を中心にして居るべからず、日本國民は皇室を中心にして奉戴せざるべからずといふ、一佛一王の極意を説明した所に日蓮聖人の特色があるのである。お題目は恰かも「萬歳」を唱へるやうなものである、お題目は唱へて居るけれども、その内容がお釋迦様から飛んでしまつたといふことになれば、萬歳と口には唱へるけれども、皇室を忘れてしまつたといふやうなもので、誰が萬歳だかわからない。自分の氣の向いた所に行つて、その者に就て萬歳と言ふやうな事になつて、或は帝釋さま萬歳、鬼子母神萬歳、カフエーの女給

萬歳といふやうな譯である。左様な萬歳は價値の低いものである、日本國民が共通して唱へる所の萬歳は「天皇陛下萬歳」でなければならぬが如くに、日蓮門下の弟子、檀那の唱へる題目は、そんな鬼子母神や帝釋に向つて唱へるものであつてはならぬ、本佛釋迦如來を目標として、そこに南無妙法蓮華經と唱へるのである。

それ故に私は「本尊論」にも申して置いたが、木像で現はしたり、文字で現はしたりすることよりも、結局は自分が心に心得て、さうして歩々念々、何時でも本佛釋尊と共に在りといふことを考へなければならぬ、歩々念々本佛を渴仰するといふ所に日蓮敎學の一番大事なところがあるのである。それを日蓮聖人は「暮れ行く空の雲の色、あり明け方の月の光までも心を籠すおもひなり」と仰せられた、暮れ方の雲の美しい色を見てはそこに本佛在せり、曉方の冴へ渡る月の光を見てはそこに本佛在せりと感ずる。これは日暮と朝とを挙げたならば、その間は何時でもといふことになるのである、始めと終りとを挙げてその間を攝することになるから、暮れ行く空の雲の色、有明け方の月の光と言へば、その間に飯を食つて居る時も、或は氣分の好かつた時も、何時でもといふことになる。だから「如何なる時節ありてか」といふのは、二六時中といふことで、朝と晩だけでは無い、「如何なる時節ありてか 毎自作是念の悲願を忘れ、如何なる月日ありてか無一成佛の御經を持たざらんや」と言はれた、この「無一成佛」の御經が南無妙法蓮華經となつて居るのである。「毎自作是念」の悲願といふ所に私がいふ本佛を渴仰して居る。だから私が著音機に吹き込んだあれだけの簡單なる御妙判でも、私のこの説明がなければ能くわからないのである。「暮れ行く空の雲の色」といつて見た場合に、思ひ出すものは鬼子母神さまか帝釋さまか……といふことでは、

迎も夜が明けつこはない。實に日蓮教學がさういふ點に於て永い間混沌として居るのは申譯のないことであるから、今後も引續き「教義信條の整束」と題して、あらゆる方面から左様な混亂葛藤を斷破して、微力を教學の發揮に捧げて置きたいと思つて居るのである。それで本日は法華經に關する實相の觀念が本佛を讀すこと、唱題行や題目の文字が本佛の偉徳を傷けること、この二點の誤謬に對して解決の意見を述べた次第であります。

大僧正本多日生師著

# 一切の勝利は人格にあり

——名古屋放送局より放送の講演——

一部 金五錢 送料金二錢  
十部 金三十五錢 (送料共)  
百部 金三圓 (送料共)

名古屋市東區田代町城山

發行所

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

## 信行の基調を説ける觀普賢經

(第二回)

井村日威

### 本經の翻譯

此經の翻譯は支那の南北朝對立の時、南朝の宋の元嘉元年に屬賓國より蜀の國に來つた、曇無密多三藏が揚州に於て翻譯せられたのである、元嘉元年は今歲大正十四年を距ること壹千五百貳年である、羅什三藏の法華經の譯出より貳十年あまり後れて居る、此經の譯出は現在の一譯あるのみで、他に異譯はない、經名は觀普賢經、或は出深功德經杯云ふ異名がある、又略して觀普賢經、觀經杯云ふこともある。

此經の註釋は圓珍智証大師が「文句」を作り、更に「記」を作つて解釋せられて居る、傳教大師の註無

量義經と同様に開結二經の研究には必要なる末疏である、今は此を參考として御断致さうと思ふ。

### 本經所説の概要

今經は前に申上げた様に經文が複雑して居る様に見へるが爲に一寸要領を得難い様に思はるゝが、熟讀して見ると明瞭に會得が出来るのである、其前後に於て主として説く方面が異なつて居る爲に、前段に於て主として説いたものが後段には從となり、前段に從として説いたものが後段には主となつて居る様に爲つて居るが爲に、一寸分り難い様に思はるゝのである、其點が判別出來れば決して難解ではないのである、今本文に入るに先立つて一經の大体をお



嚮致して置いた方が研究のお方には便宜であらうと思ふ故、其要領を申上げやうと思ふ。

此經の大意は經の題號として掲げられた「佛說觀普賢菩薩行法經」の十字の中佛說の二字と經の一字は佛說の諸經に一般に通じて居るものであるから、此三字を除いた「觀普賢菩薩行法」の七字の中に示されて居る、此七字を「觀普賢菩薩」の五字と「行法」の二字との二に分ける、此二つが此經の二大要領であらうと思ふ、「觀普賢菩薩」の五字は吾人の信仰が上佛陀の慈光に接する方面を詳細に説明かしたものである、勸發品の四法成就の中の第一諸佛に護念せらるゝことを得と説いた、其説明が此一段である、「行法」の二字は吾人が身心の改善實行の實際的方面を説いたもので、勸發品の四法成就の中には第二の諸の徳本を植へと云ふ方面の説明が本段である、今經の最終に刹利居士の懺悔を説いた一段は、勸發品の四法の中の第三正定聚に入ると云ふ圓融生活

の向上を理想したものである、第四の一切衆生を救ふの心を起せるものと云ふ點は本經には説明してない様であるが、本經の最初に三大士が佛に對して發した質問に「如來の滅後に如何にしてか衆生菩薩の心を起し大乘方等經典を修行し」云々の言葉があります、此中に「菩薩の心を起し」とは上求菩提下化衆生の大道心なれば自身の修養と同時に下化衆生の大活動は伴ふべきである、今經は専ら自身の修養を説くとも、其自身の修養が下化衆生の爲の第一階梯なれば、自身の修養方面を説いて、第二階梯の下化衆生の方面は當然の事として省略せられあるものと考へる、此が勸發品の目次に掲げてあつて此經に本文のなき所以であらうと思ふ、斯様に今經は四法成就の中の第一の諸佛護念と第二植諸徳本の二方面に就て最も詳細に説明を試みて、我等末法に佛敎を信するものゝ重要な心得方をお示に相成つたのが今經であると私は信する、斯様な意味に於て

今經が末法修行の要諦を説ける流通分であり、再演法華と稱せらるゝ價值があるのである。

經文の大段が普賢觀を明す一段と六根懺悔の法を明す一段との兩段に分れて居るのであるが、此は主として明かした方から斯く云ふので、普賢觀を明す中にも六根懺悔の法が説かれてあり、六根懺悔の行法を明す中にも諸佛を見ること、本尊に對する信仰の有様が明かして有つて互に關聯して居つて別々には説けないものであるが主として顯はして居る方から、兩大段に分けたのである、第一大段の普賢觀を明す方からお嚮を致します、觀普賢とは普賢菩薩を見ることである、觀の字を使ふてあると、法華宗の人達は直ぐに觀念とか觀法とか云ふ様に考へるが、此は觀念系の教義に先入せられた頭から左様に考へるので、此經には純信仰の方面を説いてあつて、觀念の事はない、隨がつて觀念の觀ではない、觀見の觀で見ると云ふ意味であることを一寸御願りをして

置きます、今經の觀普賢の觀は三通りに分かれて居る、第一には普賢菩薩の依報即ち菩薩の住んで居る、世界や、乗つて居らるゝ、白象の有様を見るのである、第二には普賢菩薩の本體を見る、第三には其普賢菩薩の教に隨ふて懺悔の法を行じて諸佛を見上ることを得るので、最初に普賢菩薩に出遇ふことに依つて段々教へられ導かれて行く、此は末法の我々が法華經の行者たる僧寶の指導に依つて信仰に入る順序と同様であつて、僧寶の指導無くして、直に極處に到着し得ないことを示したので、歸依三寶の次第も授戒作法の上から教授師等を要する場合も此經文に委敷お示に相成つて居る、自我偈の中に「一心欲見佛不自信身命」と我普が信仰の極致を一言で示されて居る、日蓮聖人は此經文の意味を「うえて食をわがひ、渴して水を求むるがごとく、戀しき人を見たきが如く」と併せられたが、佛陀に對する渴仰戀慕の心が信仰である、其信仰は御佛の御顔が見た

いお姿を拜みたいと云ふ事になるのである、此經に「諸佛世尊は常に世間に在す、色の中の上色なり我何の罪あつて而も見ることを得ざる」と云ふは佛の御姿を何うして拜めぬであらうと我身を責むる言葉である、此處に懺悔を行ふて罪障を除く方法を講ずる必要が起るのであるが、其佛陀を慕ひお顔を拜みたいと云ふ熱情が即ち信仰である、其有様を今經は委しく説いた、善量品に一句示した處を此經に敷衍して信仰の状態を説明したのである、此經に云ふ普賢觀とは佛を見菩薩を見ることを教へたものである、經に「大乘を誦せん者、大乘を修せん者、大乘の意を發さん者、普賢菩薩の色身を見んと樂はん者多寶佛の塔を見上らんと樂はん者、釋迦牟尼佛及び分身の諸佛を見上らんと樂はん者、六根清淨を得んと樂はん者は此觀を學すべし」と説きは此意味を言ふたのである、此處で一寸注意をして置かねばならぬことは、最初に普賢菩薩に出遇ふことである

我々本門の教に依つて信仰するものは迹化の普賢菩薩を通して本佛に出遇ふのでなくして、本化上行菩薩に導かるゝと云ふ信仰を持つて居るが、此經が迹化の普賢菩薩を主として説いてあることの爲に本門の信仰には添はない様に考へらるゝこととあります、此は還迹流通と云ふて樂王品以下は本化の菩薩の退座の後である故迹門に還つて流通すると天台大師は言はれてある通りに今の場合もさうである、勸發品の普賢菩薩の質問に端を發した今經なれば普賢菩薩を其主人公として説き明されたのであつて、本門の教義を信するものは、普賢菩薩の代りに本化上行菩薩を其位置に据へて考へれば善いのである、故に我々本門の教を信するものは本化上行菩薩の指導に依り其蒙を啓き信仰に入るのであるから、先づ本化上行菩薩の色身を見上らんと樂ひ、其願が叶へば本化の菩薩の御手引に依つて本佛の御姿を拜し得る様に御教へ下さるゝ事に成るのである、其點は誤ら

ぬ様注意致して置きます、實在の本佛を意識し、其本佛の御姿を見、教を蒙むることを樂ふのが信仰

の第一重要點であります、其の大切な點を委しくお示しに相成つたのが第一段の普賢觀であります。

大僧正

本多日生師著

本尊論

- 目次
- 一、緒言：二、宗教と本尊：三、諸種の本尊觀：四、本尊と眞理
  - 五、本尊と倫理：六、本尊と救濟：七、佛教の本尊觀：八、佛教の本尊の三方面の考案：九、佛身觀の要旨：一〇、滅後信仰の概觀：一一、遺文に顯はれたる本尊：一二、法華經に顯はれたる本尊：一三、實例：一六、遺文の會通：一七、異論の解決：一八、結論

定價 紙裝一部 金五十錢 布裝一部 金七十錢 送料金四錢

發行所

立正結社

名古屋市東區田代町常樂寺内

賣捌所

編輯局

振替名古屋一〇八一九番

罷睡錄 (其十一)

黃薇菴 青 村

二三、二人の弟子

下谷の高岩寺と云ふ寺に何日頃の事か二人の弟子僧があつた、一人は品行甚だ方正で常に寺の爲にのみ心を注いで居たが、一人は大酒を好み喧嘩好きの手のつけられない悪僧であつた。或時乙の悪僧が寺の什物を持出して賣却するのを甲が見つけて、種々と諫めを加へたが聞入れないので、つい此よしを住持に告げ「あの僧を寺に置いては爲になりませぬ逐出してお了ひなされませ」と勧めた。住持は「一先意見を加へて見よう」と、悪僧を呼び出して殿しく誡めたまふ捨て置た。

處が又候佛具を持出して賣たと聞て、甲は又住持の許へ行き「悪僧奴今度は佛具を持出して賣ました、拙僧が諫めたとて更に用ひません、お師匠さんが捨

を樂みに我が傍を放す事が出来ないぢや」と云つた。障子一重の此方に立ち聞きして居た彼の乙(悪僧)は、流石に師の恩の厚きに感泣し、翻然として善心に立還つたと云ふ事である。

是は一場の昔話だが、是に似た話が世の中には幾何もある。悪僧の行爲もとより憎むべきだが、其憎むべき悪僧の行爲を師の房に告げ、忠義顔して逐出せしと勧告する甲の行爲も、決してほめたものではない。よく勤め人仲間などに争ひの種は是れであるが、人の振見て我振り直せて、人の非を云ふ間に自分の完成を心掛けることこそ大切で、輕薄才子とならない様ありたいものである。

x x x x x x

二四、金看板甚九郎

甚九郎は芝神明前の俠客で、寶曆年中江戸で鳴らした男である。或時あはたゞしく其家へ飛込で来たものがあつて、見ると本繩にかゝつて居る、「何用あつ

て、お置になさるのならば、是非に及びませぬ、拙僧は將來禍害が寺に及び身にも罹るのが怖ろしう御座ります故、若しあの僧を逐ひ出してお了ひなさらねば、ごうぞ拙僧にお恥を戴きたう御座います」と云つた。住持は涙を浮かべ「其れでは願ひのまゝ其方に暇を取らせよう、悪僧は今暫らく我が手許に置いて追々に論ず事にしよう」と云ひ切つた。

甲は住持の意外な言葉に腹を立て、「斯う申し上げたらあの悪僧を逐ひ出されるものところ思ふて申上げたのに、却つて罪なき拙僧に暇を下さるとは近頃心得ぬ御處置で御座る」と云ふと、住持は「イヤ然でない、御身は今我寺を出たとて何處へ行てもモ一人前の僧として勤まるが、あの悪僧は今我が傍を離れたなら、忽ち捕はれて罪人となるやも知れぬ、さすれば我が徳もすたれ又一人の弟子を失ふ事となる、それ故今暫く傍に置き教誡を加へたならば、彼の命をも延し善心に立還る事もあるであらう、それ

て来たのだ」と訊くと、「親分此妾でも判りませうが手前は心掛のよくない奴、賭博にまけて不心得にも賊を働らき、今捕はれて斯くの始末、固より身から出た鎗で誰を恨み様もないが、家には一人の老母があります、今私が死にますと誰も世話をするものがないので、唯た一目逢て來たう御座います、親分何卒此繩を解いて下さいませまいか、親分でなければ此頼を聞て呉れるものは無い、一生のお願いだ何卒親分助けて下さい」と涙ながらに言て居るので甚九郎零時考へ、黙つて其繩を解いてやり、而して三十兩の金を出し「モー少し遣りたいが乃公も貧乏で是れきりだサア行け急げよ」と云つて、裏口から逃してやつた。

其時「ドヤ」と這入て來た捕人の役人「賊が此家に居る筈だ、神妙に出せばよしさもない時は爲にならぬぞ御用だ」と口々に凄まじい權幕だが、甚九郎はちつとも動せず「如何にも賊は今のさき迄

俺の所に居ましたが「何處へやつた」逃がしました。而も縄目を解いたのは此甚九郎で御座りますから、代りに縛つて下さいませ」と包み隠しもせぬ面魂、捕手の者も呆れて了ひ、其儘甚九郎に縄を打て引き立てたが、二ヶ月計り経つと前の賊が名乗つて出たので、甚九郎は牢から出される事になつた。

其時の事である、町奉行の某が、「これ甚九郎其方の快気は感心なものであるが、賊を庇つて縄目を解いた罪は重々の不届だ、死罪は通れぬ覺悟だらうな」と云はれて、甚九郎莞爾とばかり顔を上げ「申上げます」「何ぢや」「仰せは御尤で御座りますが俺には命よりも大事なのが御座ります。俺はあの賊をば知りませぬが、併し賊は俺の名を知つて助けて呉れと申して参りましたので、見て見ぬ振りは出来ませぬ、若もあの時此俺が助けなかつたら、俺の名は廢つて了ひます。而して命を全ふして名を廢らして了ひますより、名を全ふして命を失つた方がよいと

考へましたので、それであの賊を助けてやりましたのですから、固より殺されるのは覺悟で御座ります」と平然として答へた。  
奉行も訝なからす心を動かされ、「イヤ見上げた志、武士も及ばぬ立派な覺悟、どうだ是からは金看板と名乗つたがよからうぞ」と云ふ事で、今ならば執行猶豫となつて家に歸された。是より金看板甚九郎の快名八百八丁に響き渡つて、江戸の花と云はれたのである。  
ヲ、江戸の花……命よりも大事な義氣快氣、何と云ふ響きのよい單語であらう。而も江戸が東京となつて幾十年、何日のまには鍔金流行の世となり了す、嗚呼のろはしき世の中よな。



### 童話

#### べらぼうの話

古田 昂生

「おい、何んだつて、こんな所へ、こんなものを置くんだ、べらぼう奴」

「何を、置くところがなければ、こゝへ置くより仕様がねへぢやないか、何をいつてゐるんだべらぼう奴」

など江戸の人たちは、何が云ふとすぐ、

「べらぼう奴々々々」と云ひますが、さて、  
「べらぼう奴といふことは、どうゆふ事ですか」  
と聞かれたら、

「サン、それは……その、あのその……」  
と詰つて失ふてありませう。

「みなさん、べらぼうつて、どうゆふことですか、べらぼうつた言葉だか知つてゐますか」

は、アン、返事のない所を見たり知りませんな。これを知つてゐるのは廣い世界に僕一人かな。何んと偉いものであるうがな、べらぼう奴でござんせぬか。

「べらぼう奴」を漢字で書くと「狸神奴」とも書き「狸呆奴」とも書きます。

べらぼうと云ふのは人を馬鹿にして罵つた言葉です。いつの世から始まつた言葉かと調べて見ますと、「近代世事談」といふ古い書の本の中に、

寛文十二年(今から二百五十年ほど前)の春、大阪道頓堀にたいへん變つた形の人を見物に出した。

その人間は、頭は光つてゐ、顔は猿のやうで名をべらぼうといふ。

それが、評判となつて京都から江戸へ噂が廣がつて芝居を立て、諸人に見せた。これから買からぬ者を罵り、辱かしめる言葉となつた。

と書いてあります。  
有名な芝居の狂言作者 岡本綺堂といふ先生が、このべらぼうの話をもととして、芝居に仕組み「べらぼうの始め」と名付けて發表しました。たいへん變つた芝居話で、昔が、喜んで之れを讀んでゐます。

その岡本先生の「べらぼうの始め」をもととして、私は更にみんなに、このべらぼうの話しをせよと思ふのです。

買を申すと、僕も、このべらぼうの話は岡本先生の芝居で始めて知つたので、小学校で先生に教でもらつたわけでも、なんでもありません。つまり受り賣といふんで、この點を岡本先生や、みなさんにお詫申して置きます。

「何アんだ、知つたふりをして、べらぼう奴」などと怒らないで、しまひまで靜かに聞くことを願ひます。

播州の濱街道にとても廻てこりんなものが  
が流れたので、まあ、この村中大さわ  
さが持ち上がりつてしまひました。

代官さまがわざわざ濱まで来てお調べに  
なる事になつて、村では、代官さまの御出  
張を待ちわびてゐました。

代官さまがやがて、その濱邊へ来て、今  
朝この濱邊に不思議なものが流れたと申  
すがそれはどのものか」

と村の人たちに聞くと、その不思議なもの  
を一言始めに見つけた三人の漁師が恐る恐  
る前へ出て、

「ハイ、ハイ。さきほど、私共三人がこの  
濱邊へ出ますと人間だが、鬼だか、わからな  
いものが、あのやうな小舟にのつて流れた  
たものでございませぬ」

「カム、見馴れぬ舟や、ともかく、これへ  
曳き出せ捕者が檢分いたす」

といふことになつて、濱の名主が先に立ち  
大ぜいの人々が異人のくるりをかこんで連れ

て来ました。

「申し上げます、これが今朝、召捕りました  
不思議のものでございませぬ」

代官が見ると、その異人はこの國のもの  
のだから判らない、髪は長くのび、顔の色はお  
とろへ着物も潮に洗はれて破れくちで居り、  
言葉はさつぱり判りませぬ。

代官は一度びつくりしましたが、そこは  
武士ですから、じつと見つめてゐましたが、こ  
れがどこの國のものであるか代官さまにも  
判りませぬ、しかし、

「これこれ、なぜ斯様なものを放し飼にして  
置か、縄をかけて縛つてしまへ鬼とも人と  
も判らぬ由者」

と叱りつけると、名主は、

「はて、御心配なさいませぬ、委形こそや  
うに異つてゐますが、先刻から見ます處、別  
に人間に對しまして、繩をなすやうなことは  
ありません。これは異國の人間ではござりま  
すまいか」

やはり天狗かな」

「だが、天狗は海にはすんでゐないぞ」

「若しや鬼ヶ島から吹き流されて来たのなら  
うかな」

「何ッ、たゞの人間ぢやないぞ」

と、わい／＼云つてゐました。

しばらくたつて、代官は

「みなの方、何が何やらちつとも判らぬが、  
遠い海のむかうの國から、流れて来たものに  
違ひあるまい、とにかく斯様な怪しいものを  
この地へ留めおくことはならぬ、再び小舟に  
のせて、もと来たやうに海へ流してやれ」

と、途法もない無茶な命令をしましたが、  
その頃のことですから、無理もない方法であ  
つたのでせう。

と、ろが、いちばん始めに、これを見付け  
たといふ三人の漁師が、また代官の頭へ、  
恐る／＼出て来て、

「代官さま、お願ひござります。あの者を  
海へ流すのを止めて、私共へ頂くわけには

ゆきませんでせうか」

「これらを引取つて何んさいたす」

「へい、ナト金儲けがしたいと……」

「何ッ、金儲けが……マハ……、そちどもは  
抜け目のない奴らだ。よしよし然らばその方  
どもにつかはすから、よいやうにいたせ」

と、代官さまが、さう云つたなり、檢分  
もすんでそのまゝ、舳つてゆきました。

三人の漁師はたいへん嬉んで、テア、どう  
ゆう風に、これから、この異人を扱ふかと、  
相談してゐると、丁度通りか、つた、江戸  
の見世物師と、大阪の見世物師

「よし、よし、そんなら、俺たちに三十兩  
でこれを賣つてくれ」

と、申し出ました。

「何ッ！三十兩ッ！」

と叱罵して三人は大嫌ひである、その  
異人は、永い間、何も喋べてゐないと、見え  
て、そのまゝ、

「サーン」

「カム、異國と申せば、唐、朝鮮、天然、琉  
球……、それは我々もかねて知つてゐるが、  
彼等とは全く風俗が違ふぞ、はてな」

と代官は考へこんでゐましたが、

「シテ、この者はものを云ふか？」

「はい、時々鳥の泣くやうに、べうべう」

べうべう、と、申しませぬ」

「何ッ！べうべうッ！」

代官はますます考へ込んでゐましたが、  
どうしても判らない。

「たゞ、べうべうでは、何のことやら、ちつ  
とも判らない、困つたことであるの——では  
べうべうといふ國の人間かな」

「しかし、代官さま、べうべうと云ふ國は  
ついで、聞いたことがございませぬな」

こゝろして、代官も名主との話をしてゐる  
附近に、わい／＼集つて、この異人を見てゐ  
る村の人ならば、お互に、勝手な話をしてゐ  
ました。

「なア、眼の鋭い、鼻の高いところを見ると  
と、氣絶してしまひました。

「や、や、や、異人が倒れたぞ」

「そりや大變だ、金儲けのもとでが倒れては  
大變ぢや」

と、みんなが駆けよつて、抱き起し、

「おーい」

と叫んで見たが、ちつとも正氣にもどらな  
い。

「水を一杯もつてこい」

「おーい、おーい、呼ぶばかりでは通じな  
い、名前を呼ばなくちやいかん、名は何ん  
といふのだ」

「さア、その名が判らない、困つたものぢや  
の——」

「何んでも、べうべうといふのが國の名か、  
人の名らしいぞ」

「そんなら、べうべうやーい」

「べうべうやーい」

と、呼びつゞけて、やつとのことで、べう  
べう正氣にかへつた。

それから、大喜びで、江戸と大阪の見世物師が、このべらぼうをつれて、見世物にすることにしました。

「べらぼうは、これじゃ、珍らしいべらぼうぢやない」

と、先づ大阪の道頓堀から、京都の四條河原、伊勢は白子の觀音寺、鎌倉は雪の下、江戸は浅草の觀音寺と、見世物をして、たいそう評判をとり、見世物師は大もうけしました。

ところが、この異人こそ、いゝ面の皮で、自分が見世物になつてゐるとも知らず、キョト、キョトと日本中を廻つてゐたと云ひます。

これから、ちつと薄皮ななべらぼうといふやうになつたと云ひます。(をばり)



# 記事

## 各地教信

名古屋地方 十月二十六日常徳寺書院に於て行學會例會、本多親下の「法華經要文講義」△二十七日日蓮主義講演會、本多親下は「佛教徒よ釋尊に歸れ」の題下に、(一)佛教徒の使命に就て、(二)降誕の因縁に就て、(三)佛教の哲理に就て、(四)名號の統一に就て、(五)一切經の綱格に就て、(六)在世追懷の信仰に就て、(七)題目と釋尊との關係に就て、(八)結論の各項に分ち、釋尊に歸るべきを力説せられた。

八日當徳寺書院の婦人會例會。九日伊勢廳

### 大僧正 本多日生師著 教義信條の整束

(修法動行の心得)

- 目次
- 一、緒言：一、法華修
  - 行の目的：二、法華
  - 修行の作法：三、勸
  - 請：四、修法：五、祈
  - 願文：六、回向文：
  - ホ、受持文：

定價 一部 金十五錢 送料二錢  
拾五部 特價金一圓(送料共)

笹川日堂撰

### 顯本宗年鑑

立正結社東京支部の爲に印刷されたもの、希望者に買致にて頒與す

名古屋市東區田代町常樂寺

發行所

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

### 大僧正 本多日生師著 宗教の五綱に就て

本誌に連載せし「國家の興隆と佛法の興隆」の結論なり。

定價 一部 金拾五錢 送料金二錢  
拾五部 特價金一圓(送料共)

大僧正 本多日生師撰

### 法華經要文

改訂再版全文四號 總振假名付  
布装一部 金五十錢 送料二錢

河原。同日夜四日市安樂寺。何れも國友文學士講演。  
十一月八日婦人會。十二日夜十三日貴宗經御會式を東山常樂寺に修す。  
十七日行學會、本多親下の「法華經要文講義」△十八日日蓮主義講演會を常徳寺書院に開く。本多親下は「法華經と日蓮上人」なる題下に(一)緒言、(二)時、(三)國(四)人、(五)身讀ノ一、(六)身讀ノ二、(七)身讀ノ三に分ち、深刻なる感激的の講演をせられた。  
二十日夜四日市安樂寺御會式、夜本多親下の講演。

京都拾月布教 一日本山に於て國壽會修

行後講演「國體と日蓮主義」豊田通泰師△全日夜於本山大方丈青年宗教部座談會開催、盛會なりき。△二日夜本山講堂に於て立正會例會開催「佛教の大綱」(續講)原田日勇師△全日夜川東本正寺に於て二樂會例會開催「力の眞價」網野辰雄閣下。「名は體を顯はす」萩原日道師△九日正行院に於て正行婦人會例會開催。「我等が誓願」原田日勇師。△十日夜本山講堂に於て青年會例會、青年會としては珍らしき座談會につき論議百出、近來に無き盛會なりき、最後に原田本部長の批評と教訓とありたり△十二日午後六時より本山に於ては教區各寺院諸師登山参列の上、盛大なる宗御會式大法要を厳修し、終りて八時より説教「日蓮主義と覺醒」京藤義隆師。「佛入滅について」上田智達師△十四日午後六時半より立正結社主催のもとに大講演會開催「一大覺醒の時期」網野辰雄閣下。「人格修養と日蓮主義」本多日生親下。全日夜於本山大方丈青年宗教研究會開催「佛教研究について」土持良達師△全日夜本山講堂に於て例月講演開催「二世一貫の信仰」豊田通泰師。「現代救済の指針」有田宏道師△十日川東本正寺婦人會例會「修養と信仰」金光孝碩師。十六日夜川東仁王門

波光寺に於て講演「日蓮主義」有田宏道師。  
**顯本健兒會拾月報告** 四日健兒會例会  
 高等部「大和民族の特色」中島孝治氏△十一  
 日全例會高等部「責任感に就て」土持真達師  
 △十八日全例會高等部「眞情の芽生」土持真  
 達師△廿五日全例會高等部「女性訓」土持真  
 達師。尙毎日例会には有田、豊田各師を始め  
 めとし新葉、龜井、山田の青年部員、有田、  
 金光、高木、林、住江の各高等部員男女會員  
 本會の爲め奮闘せられつゝあり。

**大阪教報** 十月三日堂園寺にて精神教  
 化講演「己を知れ」山脇大佐。「愛國愛人の精  
 神」齊藤昂花氏△五日蓮成寺にて談話會「信  
 念成佛」和井田氏。「一念三千論」京藤師△十  
 日鐵佛會△十一日堂園寺にて龍口法難會「龍  
 口法難を追憶して」京藤師。信仰生活の感懐」  
 上田師△十三日實業會館にて「信仰  
 の力」原田部長。「日蓮聖人の人格  
 と大信心」本多日生鏡下△十四日  
 蓮成寺にて婦人會「法華經の信仰」  
 本多鏡下△十七日平山宅にて「如來の大  
 慈悲」京藤師△二十二日堂園寺にて「孝養に  
 就て」京藤師。「開法の心得」上田師△二十四  
 日學生日蓮鐵佛會「釋尊出世の本懐」中川文  
 學士△二十五日鐵佛會△二十八日蓮成寺にて

龍口法難會「日蓮聖人の大恩」京藤師。「感激  
 の精神と責任觀念」豊田師。何れも頗る盛會  
 多大の効果を奏し三四の改宗者をも出したリ  
**金澤市教** △十月六日夜、於坂井氏宅  
 「國家的大善」本郷常次郎氏△十三日夜立正會  
 講演「衆生教化の方法」本郷氏△廿六日天晴  
 會講演「佛敎と競争」本郷氏△廿八日午後三  
 時本行寺會式講演「佛と蓮華」杉田常長師。  
 「感恩の道徳」本郷常次郎氏△廿九日立正寺御  
 會式「經卷相水」杉田師。

**鳥取縣松崎** 九月二日夜松崎本立寺に於  
 て講演「正しき信仰」富田日蓮△十四日夜、  
 倉吉町立正會矢口宅にて「三寶論」富田日蓮  
 △十月十三日午後、市橋宅にて「日蓮聖人傳」  
 △十六日富田日蓮△十八日午後泊村題目講に於て  
 「佛敎の力」富田日蓮△廿五日夜吉學佛寺立  
 正會研究部にて「本尊に對する所感」富田日  
 蓮△十一月四日午後市橋宅にて「日蓮聖人傳  
 其七」富田日蓮△五日夜吉學佛寺にて立正  
 會研究部に參照立正安國論所感」富田日蓮。  
**千葉縣宮谷本國寺** 十月三十日秋季朝  
 日講開會、午後一時より説教講演「福徳は自  
 身を滅して他を照す」土屋山主「六百五十五  
 年前を偲ぶ」中村日鏡僧正「佛の教」栗原顯

有師。夜間「身延に詣で、」若佐春治君。「日  
 蓮聖人の人格」栗原顯有師。「日蓮聖人の慈悲」  
 木村義明師。「統一節」小松原血染の雲「伊  
 豆伊東師弟の涙」手代木常整師。聽衆は晝夜  
 共一千餘名、法悦歡喜の境に入りしを覺ゆ、  
 因に毎年春秋二季朝日講開會に際し富田藤吉  
 櫻井若松外數氏の朝日講世話掛として自行化  
 他的萬事に誠實幹旋の勞を執り努力せられた  
 る事を感懐す。

**立正結社増穂分會** 十月十二日社員總  
 會「信仰生活」木村義明師「七聖財」。本郷講  
 師川崎英照師△十八日蓮成寺例会、「信仰の妙  
 味」石井健一「立正結社に就て」、森田會正△  
 廿九日本成寺例会、「信は力らなり」森田會正、  
 「龍の口御法難に就て」石井健一△廿九日夜  
 芳噴寺例会「日蓮主義に就て」森田會正。

**名古屋自慶會報**

名古屋の自慶會は益々昌へて行く、近頃  
 乃つて熱心に頼んで来る工場は増加するし、  
 教化された職工は、他の如何なる動搖にも侵  
 されない確信を有する様になつた。  
 十月廿六日菊井紡織△同日山岸製材△二十  
 七日豊田式機織△同日豊田紡織△二十八日

本車輛に於て「朝鮮に關する所感に就て」△  
 二十八日濠定商店△二十九日三菱内燃機△同  
 日東洋紡績尾坂工場に於て「人格修養に就て」  
 何れも本多鏡下の講演があつた。

十一月十六日豊田押切工場「朝鮮に關する  
 所感」△同日日本車輛「使命の自覺」△同日日  
 本母子「我等の使命」△十七日菊井紡績「月  
 上女の話」△同日東京モスリン「我等の使命」  
 △十八日豊田織機「佛敎の六善根」△同日日  
 田紡績「佛敎の六善根」△十九日服部紡績修  
 養の三方面」△同日三菱内燃機「三方面の自  
 覺」△同日山岸製材「三方面の自覺」△廿日  
 豊田製下「佛敎の六善根」△同日東洋紡績富  
 田工場「我等の使命に就て」本多鏡下の講演  
 があつた。

**朝鮮釜山顯本會堂開館式**

大正拾四年拾月拾七日、釜山顯本會堂開館  
 式につき管長本多日生鏡下等を迎へて一大式  
 典を挙行す。當日本土より隨喜參列の士は、  
 東京井村日成師京都原田日勇師、金光孝順師、  
 信徒代表高岡義雄氏、福秀經兒玉常宣師、山  
 口縣林紀野俊耀師岡山縣大川孝準師、信徒代

**高岡信行學會  
講演會**

去る十月二十九日日蓮上人龍口法難の日を  
 紀念し講演開館會場妙國寺に於て夕七時開會  
 島山友次郎氏の「心」と題し熱血を以て四十  
 分同程の信仰講演、次には丹塚本勇師の「龍  
 口法難に就て」の下に一時閑餘の講演終つて  
 胡麻の餅を啖ちて聽者一同は彼の日蓮上人の  
 法難の日を追想し頂きて十時閉會、聽衆百五  
 十名の盛會であつた。

日蓮上人の御難の日をしのびて  
 大空のその輝きに澄む月の  
 光を射すと引くことし  
 古谷孫右衛門

表林伊平氏、廣島經富元會榮師、三須敬英師、  
 吳市田中宣正師等。

左に管長鏡下の慶讃文を掲ぐ。  
 時大正十四年十月十七日釜山顯本會館落成  
 開館式を挙行す今や人心教化の事一層急要  
 を告ぐる時此の盛會を見る實に慶賀に堪へ

ざるなり由來正法を宣傳するは最大の善事  
 たり管長横山惠正師十年苦心經營の結果清  
 淨の信男女至誠此舉を贊助し茲に完成を見  
 る其の功徳の廣大なるは言を待たざる所な  
 り經に云く以體持正法因緣得此金剛身と此  
 淨業に參加する者金剛の佛身を成就せんこ  
 と要なし我等一行十數名途かに此の地より來  
 りて慶讃の誠意を捧ぐ佛天三寶實感加護し  
 たまへ此日天氣清朗風無く日或し感應斯の  
 如し法喜限り無し仰き願くば正法興隆皇運  
 隆昌信男男女恣地成就ならしめ給へ。南無  
 妙法蓮華經。  
 顯本法華宗管長總本山妙滿寺貫首大僧正  
 日 生 釋 首

佐藤鐵太郎中將等の祝辭、朝野諸名士の祝  
 電あり。同日午後七時より當會堂に於て紀念  
 大講演を開く。「所感」田中宣正師、「醒めたる  
 協力」兒玉常宣師、「敎の教」金光孝順師、「思  
 想改善と佛敎」井村日成師、「日蓮聖人の人格  
 と其信仰」大僧正本多日生鏡下。  
 翌十八日午後二時より第一小學校々堂に於  
 て釜山府廳、釜山教育會主催講演會「東洋思  
 想の大共通點」本多日生鏡下。同日午後七時  
 より會堂に於て記念大講演「釋尊の宗教日蓮  
 の繼承」大川孝準師。「永遠の光明」富元會榮  
 師。「佛敎徒の覺醒すべし」要點「紀野俊耀師  
 「生活の安定」原田日勇師。「法華經の大綱」本  
 多日生鏡下。

勝海舟先生遺蹟保存  
清明文庫事業資金 勸 募

設 立 趣 意

江戸城受渡は王政復古の大業を完成せる要件なり、若し其の受渡にして圓滿に行はれず、官幕兩軍兵火を交ゆるに至らば、江戸八百八街は忽ち焦土と化し、五十餘年前に於て、昨秋九月の大震災火災以上の惨害を見るべく、延いて内亂を惹起し國內の人心動搖せば、佛國は幕府に左袒し英國は薩長を援助し、外國干渉の端緒を開き、皇國の隆替に關する重大なる危機に瀕するに到りしやも亦知るへからず、今にして之を思ふも猶慄然たらざるを得ざるなり。

此の重大なる時機に際し、江戸城攻撃開始豫定の前日たる慶應四年三月十四日、勝海舟西郷南洲兩雄の意氣相投し肝膽相照したる會見に依り、官幕兩軍の接戦を未發に止め、平和の間に其の受渡を了したるは、江戸住民の幸福たりしは固より言を俟たず、我が帝國興隆の第一歩に一大慶福を與へられたるものなり。

今や我が國民は、内は帝都復興の緊急なる状態を顧み、外は國際關係の重大なる結果に鑑み、大に奮起を要する秋に方り、五十餘年前に於ける江戸城受渡の當時を回想せば、誰か勝西郷兩雄の私心を去りて國家を憂慮せる至誠に對し大に感激せざる者あらん。

且夫れ最近數年來、世道人心は頹廢し國民思想は動搖し、國民の精神作興を要すること今より急なるは無きの時機に際し、勝西郷兩雄の如き、公明正大一點の私心なく、功名富貴を超越して國家の重を以て自ら任せる、大偉人の精神と人格とを國民の直面に展開して活躍せしむるは、國民教化の爲に一大權威たるを得へし

此秋に方り伯爵勝精君は、先代海舟先生遺愛の別宅たる洗足軒、及其の移轉地に充當すべく、海舟先生の墓並に西郷南洲先生を祀りたる留魂祠の所在に隣接する土地を、國民精神作興に活用する目的を以て本會に寄贈せられたり。

本會は其の寄贈を受け、一面之を永久に保存するの途を講し、一面其の活用を一層有効ならしめんか爲に

教化機關を設置すべく、洗足軒を中樞とする清明文庫を設立し、政治、法制、倫理、哲學、宗教、國史其他國民精神涵養に資する圖書を蒐集して、公衆の閱覽に供し、且附屬講堂を設け倫理、哲學、佛教、儒教、神道及國史の講座を開設して、篤學者又は求道者に研究と教養との機會を與ふる施設を爲し、以て教化の淵源を究むる道場たらしめんと欲す。

以上の趣旨を實現すべく計畫せる事業費の豫算は、左に記載する如し、幸に大方の贊助に依りて之を完成するを得は、獨り本會の光榮たるに止らず、國民精神の作興に資し、國家興隆の一助たらしむるを得へし本會は今や内外多事の重要な時局に際し、道を求め國を愛する志士仁人の本事業に賛同せられ、深厚なる援助を給はらんことを冀ふ。

大正十三年九月一日 財團 清明 會

事業費豫算

一 金 五 萬 圓 也 設 立 資 金

金	參	千	圓	洗足軒移轉及修繕
金	壹	萬	圓	書庫(鐵筋コンクリート二階建 建坪二十坪延坪四十坪)
金	壹	萬	圓	閱覽室及講堂(木造二階建 建坪四十二坪延坪七十五坪)
金	壹	千	圓	附屬屋(木造平家建建坪十五坪)
金	五	百	圓	電 燈 設 備
金	參	千	圓	門、外圍及庭園
金	參	千	圓	家具及什器
金	五	千	圓	書籍(一部ハ篤志者ノ寄贈ヲ受ケ一部ヲ購入ス)
金	參	千	圓	設立趣意宣傳費
金	貳	千	圓	設立事務費



一金五萬圓也 維持基金  
合計金拾萬圓也

寄附規定期

- 一、清明文庫事業資金は篤志者の寄附金を以て之に充つ
- 一、寄附金の申込は清明會事務所に於て之を受く
- 一、寄附金は清明會振替口座(東京四四七六六番)又は左記銀行に於ける清明會當座口に拂込を請ふ
- 株式會社第一銀行本店 株式會社十五銀行本店
- 一、寄附者の芳名及金額は國民新聞紙上に之を掲載す

東京府在原郡馬込村字長原  
財團法人 清明會

社告

年賀廣告を取扱ひます

大正拾五年一月一日發行の統一誌上に我徒同志の賀詞を掲載して已人賀狀の贈答を省略してはいかゞですか  
特に本誌を御利用相成ることを御すゝめします

申込期日 十二月十五日限り  
申込所

料金 五號活字三分分金五十錢他は之に準ず(料金は前納の事)大体は昨年の例による  
名古屋市東區田代町 統一編輯局  
東京府在原郡品川町眞了院 大森日案

立正館建設淨財勸募之辭

世道人心荒廢シ國民思想ハ混亂シテ日々險惡ナラントス、憂國ノ士豈ニ慨嘆セザランヤ斯ノ難局ヲ開轉セシムルニハ最高ノ宗教ニ依テ國民精神ヲ振作更張シ、思想ヲ啓發善導スルヲ以テ要諦ナリト信ス、大衆釋迦牟尼世尊ハ毒蛇猛獸ヲ恐怖スル事勿レ惡思想ヲ警戒セヨ、惡思想ハ無量ノ善心ヲ壞リ惡道ニ墮スト宣說シ給フ(取意)

高祖日蓮大聖人ハ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ「國土乱レン時ハ先ツ鬼神乱ル、鬼神乱ルガ故ニ萬民乱ル」ト喝破シ給フ、國民思想ノ惡化ハ遂ニ其ノ國家ヲ破壊シ國民ノ福利ヲ危殆ナラシムルノ例證近キニアリ

願ルニ我カ吳市ハ帝國海軍ノ中樞ニシテ國防工作ノ源泉ナリ否東洋平和ノ秘鍵ナリ十有五萬市民ハ其ノ細胞ナリ、機能ナリ、是ノ如キ樞要ナル都市ニ於テ開顯統一ノ妙教日蓮主義道場ノ完備ヲ缺クハ聖代ノ一大恨事ニシテ末流ヲ汲ムモノ眞ニ慙愧ニ堪ヘザル所也、茲ニ於テ吾等同人數年來念願セル立正館(教會所)ヲ建立シ正法廣宣ノ天業ニ參加躬行スルノ光榮ニ浴シ、竿頭一步ヲ進メテ各宗各派ノ偏重ヲ正シ、佛敎ノ社會教化運動ノ爲メニ公開シ、國民精神作興、思想善導ニ貢獻シ、以テ本佛恩山ノ一塵ニ應ヘ聖恩德海ノ一滴ニ擬シ奉ラントス、希クハ清信ノ士女振テ斯ノ淨業成就ノ爲ニ隨喜贊助アラシム事ヲ

發起人

- 富元會 榮 田中宣正 眞鍋鶴吉 田中慶太郎
- 加賀セイヤ 加藤淺市 桐山廉平 樽崎長市
- 小阪武助 世羅贊之助 原田良圓 外一 同

淨財勸募要項

- 一金六千七百圓也 敷地 約九十坪
- 一金六千圓也 會館木造建 約六十坪
- 一金壹千六百圓也 理木造建約 約二十坪
- 一金壹千圓也 御寶前裝嚴費
- 合計壹萬五千三百圓也

社寺建築及臺灣檜材の安價提供  
設計監督

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候  
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

東京市總町區有樂町三丁目三番地  
社 寺 工 務 所

(電話銀座四〇八八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

山 寺 工 務 所 大阪支所

(電話五區川二二四番)

臺灣檜材の六大大特徴  
一、耐久防腐  
二、蟻害絶無  
三、香氣清楚  
四、木質堅緻  
五、木理整然  
六、木色高雅

價 定 一 統		
一	半	一
ヶ	ヶ	冊
年	年	金
金	金	貳拾錢
貳圓貳拾錢	壹圓貳拾錢	送料共
送料共	送料共	送料五厘
事之金前	事之金前	

料 告 廣 一 統		
四	半	一
分		表
一	頁	紙
頁	金	一
金	拾	頁
五	九	金
圓	圓	貳拾
事之金前	圓	拾

大正十四年十一月十七日印刷納本  
大正十四年十二月一日發行(第三百六十九號)

不 許 複 製

編輯兼 發行所 編輯所  
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
印刷所 三益社  
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 統一發行所  
名古屋市長島田代町字城山七十七番地  
編輯所 統一編輯局  
名古屋市長島田代町字城山七十七番地

電話東京五二〇七一番  
名古屋五五二〇八一九番